様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２４年　４月２８日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20530680
研究課題名（和文）西欧的「人間」教育学の制約性に関する歴史的・文化的比較研究

研究課題名（英文）A comparative study on the historical and cultural conditions of the Western conception of human being

研究代表者
沼田　裕之（NUMATA HIROYUKI）
東北大学・大学院教育学研究科・名誉教授
研究者番号：80050269

研究成果の概要（和文）：
(1)　本研究は、ルネサンス期が「世界と人間」を発見した、とする J.ブルクハルトの主張を読み直すことから出発する。そこから西欧近代の人間観再評価を行おうとしたのである。その基礎的作業として、彼の著書『イタリア･ルネサンスの文化』の第 1 版原典批判校訂編集した。その結果はドイツで出版される予定である。
(2)　ルネサンス以後の西欧「近代人」の感受性や思考方法は日本文化が生み出した人間の型とは異なる面が強く、異文化間の相互理解は容易ではないことが再確認された。

研究成果の概要（英文）：
(a) A careful reading of J. Burckhadts *"The civilization of the Renaissance in Italy"* reveals us that only by reading the book in its first edition makes us understand the author's original ideas about his well-known "the discovery of the world and of man" in the Renaissance. So that the author of this project edited the book with commentaries and annotations in order to reproduce the original intention of J. Burckhardt which will be published soon in Germany.
(b) Modern Western man after the Renaissance differs historically and culturally from the modern Japanese born in a different culture and history that it is not easy to speak of the mutual understanding of the two different cultures. This simple fact was verified by our study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：ブルクハルト、ルネサンス、近代的個人、文化史、人間観の比較、欧米と日本、普遍的人間像、異文化理解

１．研究開始当初の背景
(1)学術的背景・動機
　本研究代表者は長く日本における教育目的のあり方を研究してきた。
　明治以来の日本の学問は､教育学に限らず､ヨーロッパ近代の学問を模範としてきた。ヨ

ーロッパの学問は当然ながら、ヨーロッパの歴史・文化の中で生まれたのであり、その地の教育学はヨーロッパの人間を前提として作られている。

そのような教育学の成果を日本の風土に当てはめることはできるのだろうか。ヨーロッパ的な人間のあり方についての考え方はそのままでは日本人には適用できないのではないか。

一例を挙げれば、「人格の完成」は教育基本法に示されている教育の目的だが、この「人格」あるいは「完成」は何れもヨーロッパ生まれの概念であり、ヨーロッパの人々が考える「人格の完成」は日本の教育界にほとんど伝わっていない。そもそも「人格の完成」を目指すこと自体日本の風土に馴染んでいるかどうかも問題にしなければならない。

こういった問題点に関して、本研究者は既に、

－沼田裕之「西洋の教育思想における『人間性』の諸問題(近世)」(『教育哲学研究』第 49 号、1984)

－沼田裕之「教育哲学への序章　－細谷恒夫『教育の哲学』批判－」(『東北大学教育学部研究年報』第 42 集、1994

などの論文で論じ、また以下の著書を通しても世に問うた。

－沼田裕之著『教育目的の比較文化的考察』玉川大学出版部 1995

－沼田裕之著『国際化時代日本の教育と文化』東信堂 1998

－沼田裕之著『教育の条件　－人間・時間・言葉－』東北大学出版会 2002

さらに 1990 年代から世界比較教育学会（WCCES）に参加し（1992：プラハ；1996：シドニー;2004:ハバナ、2007:サラエボ等)、世界の研究者に文化の歴史的文化的制約性について述べてきたが、かなりの反響はあるものの未だ十分に説得できないで居る。

以上のような学術的背景を持つ本研究者が、議論をより説得的に行うためには、さらに以下の 2 点を究明する必要がある。

① ヨーロッパの教育が前提としているヨーロッパの人々の歴史や文化を相対的・批判的に考察し、その成立条件をさらに明確にすること。それとの関係で日本文化、日本人のあり方の相対的特性を明らかにすること。すなわち、ヨーロッパ文化を絶対視することも、日本文化を絶対視することもせず、両者の相対的特性を明らかにすること。同時に内外の研究者により説得的な議論を考えること。

② そのためにはあまりにも当たり前な「人間」という概念を古代ギリシアから現代に至まで批判的に捉え直す必要がある。しかし、それは長期にわたる大きな研究になるので、先ず、明治以後の日本に直接関連するヨーロッパの近代に焦点を絞り、ルネサンス期のヨーロッパの人々を、日本人を念頭に置きつつ、相対的・批判的に特徴付け理解すること。

(2)本研究の直接的動機

このような問題意識を持っていたところに、スイスのバーゼルに本拠を置く Jacob Burckhardt-Stiftung（ヤーコプ・ブルクハルト財団）から、ブルクハルト没後 100 年(1997 年)を記念して刊行を開始した *Jacob Burckhardt Werke, Kritische Gesamtausgabe*（『ブルクハルト全集』）の第 4 巻 *Die Cultur der Renaissance in Italien*（『イタリア・ルネサンスの文化』)を日本人学者のチームで批判校訂編集しないか、という提案があった(1995)。この提案は本研究代表者の問題意識に合うものであり、この作業を 1996 年、(故)東北大学文学部原研二教授と共に引き受けたことが、本格的にブルクハルトに依拠しつつルネサンス期のヨーロッパ的人間像を研究するきっかけになっていた。

２．研究の目的

明治以来、日本を近代化するために模範としてきた近代ヨーロッパ文化、その中で生まれた人間形成理論は日本文化の中でどこまで有効なのか、ということを追及し、その上で、現代日本の教育に適した教育目的を追求することが、教育哲学を学ぶ一学徒としての本研究代表者の出発点であり、また研究の目的である。

(1) 長期目的

欧米と日本の教育目的がその歴史的・文化的条件によって異なっており，欧米生まれの教育理論を単純にそのまま日本に持ってきても日本の土壌に合った教育理論になり得ないことを証明するためには次の 2 つの方向を目指した研究が必要である。

① 歴史的連続性を重視する欧米の人間形成論が到達した近代、あるいは現代の教育観を理解するために、どうしても古代ギリシアに遡り、そこから現代までの「人間形成」に関する歴史的・文化的条件を厳密に検討すること。

② その上で，日本古来の「人」あるいは「人間」に関する見方を，欧米との比較を念頭に置きながら、検討し、さらには、現代日本の教育に適した「人間形成」理論を提案すること。

(2)当面の目的（3 年計画）

上記の長期目的を達成するにはかなりの年月が想定される。そこで、今回は次の 3 点に限定した研究目的を追求した。

① 先ず、明治以来の日本に最も影響を与えた「近代的個人主義」の源流であるルネサンス期に焦点を絞り、そこでの人間観を明確にすること。その歴史的･文化的条件が必ずしも普遍的なものではないことを明らかにすること。

そのための手掛かりとして、個人主義的な「近代人」を発見したと言われる思想家の一人ヤーコプ・ブルクハルト（Jacob Burckhardt 1818－1897）の主著『イタリア･ルネサンスの文化 *Die Cultur der Renaissance in Italien* 1860』に焦点を絞り、その厳密な読解を通して、通俗的なブルクハルト解釈を越えた彼の真意に迫って、彼が意味していた「近代的個人」なるものの真意に迫る。

② ①の目的に迫るためブルクハルトのこの著書を原典批判校訂しつつ、あらゆる角度から､彼の真意に迫ること。また、その成果を原典批判校訂版として出版すること。

③ ブルクハルトをヨーロッパ思想史･文化史の中で批判的に位置づけ、日本文化との関係でその特性を明確にし、その成果を日本及びヨーロッパで学会その他の場を通して発表し、批判を仰ぎつつ、長期目的達成に向かうこと。

３．研究の方法

(1)『イタリア･ルネサンスの文化』を通してブルクハルトが主張したかったことを正確に理解するために、基本的資料としてその原典を批判校訂編集する。そのために、ブルクハルトが用いたルネサンス関係資料を読み直し、またブルクハルト自身の草稿、メモなどを調査し真意を確認する。これらの資料は、日本にはほとんど存在しない。間接的資料が、上智大学、東京大学などの図書館に散見するのみである。現在インターネット上で見ることができる PDF による公開古書も限られている。従って、(スイス)チューリッヒ中央図書館（Zentralbibliothek Zürich）及びバーゼル大学図書館（Öffentliche Bibliothek der Universität Basel)に収められているブルクハルトが実際に使用した図書などを直接調べるしかない。そこで、これらの図書館に赴いて、資料を調査する。さらに、ブルクハルト自身の草稿やメモはバーゼルの国立文書館（Staatsarchiv Basel）が所蔵しているので、現地に赴いて、資料に当たってみること。

(2) これらの資料研究の成果を、ブルクハルト研究に造詣の深い(ドイツ)マインツ大学アンドレアス･チェザーナ(Andreas Cesana）教授及び、同大学エディット･シュトルフホルツ(Edith Struchholz）研究助手と定期的に研究会を行って，批判を仰ぎつつ行う。(この研究会は，3 年間の本研究期間中 6 回行われた；2008,2 月[東北大学]､同 12 月[マインツ大学]，2009,3 月[マインツ大学]､2009,8 月[マインツ大学]､2010,2 月[マインツ大学]，2011，2 月[マインツ大学])

(3) 以上の研究成果を内外の学会その他の機会に発表し，内外研究者の批判を仰ぐ。3 年間の研究期間に関して言えば特に次の 2 つの国際学会で研究代表者の考えを述べた(以下、[学会発表]の①及び②)。

４．研究成果

(1)ブルクハルト『イタリア･ルネサンスの文化』の研究から得られた成果：

①原典の批判校訂編集

この書の第 1 版は 1860 年に，第 2 版は 1869 年に出版された。ブルクハルト自身はここまで目を通したが、以後はガイガー（L.Geiger）が編集することになった。ガイガーは膨大注釈を付けたが、次第にブルクハルトの当初の意図とはかけ離れた版を作るようになった。現代の流布版は多かれ少なかれこのガイガー版に影響されている。

そこで、第 1 版に戻ってブルクハルトの元々の考えを復元してみると、「文化史」に関して重要な考え方がそこに見出されることが分かってきた。この新しい原典批判版は以下の表題(仮題)で間もなく出版される予定である。

Die Cultur der Renaissance in Italien, herausgegeben von dem verstorbenen Kenji Hara und Hiroyuki Numata, in: *Jacob Burckhardt Werke*, Kritische Gesamtausgabe, Band 4 C.H.Beck München / Schwabe Basel

②原典を詳細に検討して得た成果

この詳細は、現在出版準備中の『原研二教授記念論文集(仮題)』(2011 秋、出版予定)に掲載予定の本研究代表者論文「語り得ぬ歴史的“事実”への情熱－ヤーコプ･ブルクハルトの場合－」で述べるので、要点のみをここに記す。

－ブルクハルトの「文化史」は様々な解釈を著者自身が想定しつつ書かれたものであり、確かにルネサンス期は「世界と人間の発見」と言われる特徴を持っているが、その発見を一義的に解釈することはできないこと。

－「近代的個人主義」なるものも一義的ではなく、ブルクハルトの捉えるルネサンス期の人々は古代とも中世とも深く繋がっているのであり、決して、ここから文字通り全く新しい「近代人」が生まれた訳で

はないこと。
　ーブルクハルトは、一方で歴史の変化を重視すると同時に，他方で、歴史を通して変わらざる普遍的な「耐え忍び、努力し、行動する人間」を認めている。ブルクハルト自身はヨーロッパの人間を対象に考察を進めているが、このような「耐え忍び、努力し、行動する人間」の姿は、東北･関東大震災の被災者などにも感動的に見出される人間の姿であって、ブルクハルトのこの「普遍的人間」のあり方についての考え方はさらに詳細に日本その他の異文化との関係で検討されるべきである。

(2)国際学会での成果発表

① 3 年計画の本研究が始まった年(2008)に、本研究代表者は東京日仏会館で日仏の研究者を集めて 2 日間にわたって開催された、日仏交流 150 周年記念シンポジウム『変容する社会と教育システムの挑戦 les défis des systèmes éducatifs dans deux sociétés en transition』で発表とシンポジウムの総括を行った。演題は Numata, Hiroyuki: Différences culturelles entre le Japon et la France – Comment un rousseauiste japonais interprète les dernières réformes,
である。この中で、島崎藤村の場合を取り上げながら、日本とフランスの感受性の違い、文化の違いについて発表し，同時に、現在日本とフランスで行われている教育改革と、この文化の差についての総括的結論を述べた。その内容は以下の［図書］④に公表されている。

② 3年計画の最終年である 2011 年 2 月 21, 22 の両日（ドイツ）マインツ大学で開催された学会 Tagung: Umgang mit kultureller Pluralität(多文化世界の中での付き合い方）に招待された折に、本研究代表者は以下の題名で発表を行った Numata, Hiroyuki: Ein deutscher Philosoph inmitten der japanischen Kultur – Karl Löwith und Sendai, （日本文化の中の或るドイツ人哲学者の場合ー　カール･レーヴィットと仙台)。
　この発表の中で、本研究代表者が主張したこと、それは、レーヴィットのように優れた哲学者の場合、日本とヨーロッパの相違は知的には深い次元で理解され、ヨーロッパの合理的物の見方の長所と短所、日本的、あるいは禅仏教的見方の長所と短所なども完璧と言えるほど見事に理解されたこと。にもかかわらず、生活の次元、日常生活での感受性、行動の仕方等、いわゆる肌で感じる文化の差、のような次元では彼はどうしても日本人の生き方を是認することができなかったこと。
　レーヴィットのような優れた知性にしても文化の違いを乗り越えることはほとんど不可能に近かったと言えるのである。哲学者だからそうなのか、庶民であればむしろ容易に異文化を理解できるのか、こういった点についてはさらに研究される必要がある。
　こういった議論を展開したところ、この学会の参加者はかなりの反応を示してくれた。本研究代表者が 30 年以前から主張してきたことがようやく認められつつあることを実感している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 沼田裕之「フランスにおける『労働』の教育学的位置」､『フランス教育学会紀要』(査読有）第 21 号、2009、pp.5–10
② 沼田裕之「フランスの『労働教育』観とルソーの示唆」､『フランス教育学会紀要』(査読有）第 21 号、2009、pp.10–14

〔学会発表〕（計 3 件）

① Numata, Hiroyuki: Ein deutscher Philosoph inmitten der japanischen Kultur – Karl Löwith und Sendai, (学会名）Tagung: Umgang mit kultureller Pluralität(多文化世界の中での付き合い方), 2011, 2, 21 (ドイツ）マインツ大学
② Numata, Hiroyuki: Différences culturelles entre le Japon et la France – Comment un rousseauiste japonais interprète les dernières réformes, (学会名） 日仏交流 150 周年記念シンポジウム『変容する社会と教育システムの挑戦 les défis des systèmes éducatifs dans deux sociétés en transition』, 2008, 10, 10－11, (東京）日仏会館
③ 沼田裕之、「フランスの『労働教育』観とルソーの示唆」、第２６回フランス教育学会・シンポジウム、2008,9,20, 中央大学

〔図書〕（計 4 件）

① （編著）沼田裕之･増渕幸男編著『教育学２１の問い』[担当部分：序章「教育学を問うとは」（pp. 9－22）、2 章「教育は何を目的とするのか」（pp. 33-45)](総頁 277+xxiv）福村出版、2009
② （編著）沼田裕之･増渕幸男･伊勢孝之編著『道徳教育２１の問い』[担当部分：はじめに「道徳とは何だろうか」（pp. 9-18)、1 章「道徳はいつでもどこでも同じように理解されているだろうか」(pp. 20-29)、4 章「民主主義、正義、人権などの原則

はどのようにして生まれたのだろうか」(pp.54-63)（総頁 258+xxv）福村出版、2009

③ (共著)フランス教育学会編『フランス教育の伝統と革新』、沼田裕之「教育理論」(pp.26-34)(総頁287)大学教育出版、2009

④ (共著)園山大祐・J.F.サブレ編著『日仏比較:変容する社会と教育』、沼田裕之「日本のルソー研究者から見た最近の日仏教育改革」(pp.273-291)（総頁310)明石書店、2009

６．研究組織

(1)研究代表者

沼田　裕之（NUMATA　HIROYUKI）

東北大学・大学院教育学研究科・名誉教授

研究者番号：80050269

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし